

## 沢入 塔ノ沢の仏教信仰の痕跡 (2)

講師 藤井 実さん(東町花輪)

寝釈迦は不動岩に直接彫られた磨崖仏。驚くことに、寝釈迦の右半身は不動岩本体からはみ出した岩に彫られている(今は、はみ出した部分に石垣が組まれ、コンクリートで固められている)。

その周辺には寝釈迦を守るかのように小さな石仏を数体拝すとができる。

寝釈迦の制作年代を推測すると、江戸時代後期の天明二年(一七八二)四月、高山彦九郎がこの地を訪れた記『沢入道能記』には、沢入塔と寝釈迦の記述があり寝釈迦は「近年の作なり」と記している。しかし、その八年ほど前の安永三年(一七七四)にも毛呂権藏氏が三十年ほど費や

し著した『上野国志』<sup>こうぜいこくし</sup>には、寝釈迦の記述はない。権藏が寝釈迦を見落とすはずはないのである。

すると寝釈迦像は、江戸時代後期の安永四年(一七七五)から、天明元年(一七八一)の間に彫られたものであろうと推測する。

彫った人は不明だが、勝道上人・弘法大師あるいは天海僧正というが、この話はあくまで言い伝えの世界。

勝道上人・弘法大師は八世紀、天海僧正は十六世紀の人物。三人の生きた時代と寝釈迦が刻されたと思われる時期とは時を異にする。

ただ、山深い人々にとって、三人の高僧の名をあげるほど

寝釈迦は人々にとってこの上もなく「ありがたい」仏様であったことを物語る。

また、寝釈迦は足尾銅山で命を落とした多数の者たちを弔うために刻されたという。

安永の頃、足尾銅山の銅の産出量が減少傾向にあり、増産を期す幕府は、過酷な労働を強い、それとともに命を落とす者も増えたことが予想される。

そんな時期、「寝釈迦」は製作されたのであろう。いずれにせよ「寝釈迦」は村の人々の尊い祈りの対象であったに違いない。

### 四 相輪塔(沢入塔・白蛇塔)

寝釈迦の対岸には、高さ約十八呎(『勢多郡東村誌』)といわれる自然石(花崗岩)の岩「相輪塔」が屹立<sup>きつりつ</sup>している。

「相輪塔」は仏教信仰の象徴であり、仏塔五重塔などの先端に付けられた宝塔を相輪(宝輪)に似ていることから「相輪塔」と名付けられたという。塔の中段やその周囲には数体の石仏(羅漢像)が塔を守るように鎮座されてござる。

この塔は、袈裟丸山の天狗が渡良瀬川にあった小田巻の淵(押手橋<sup>おしでばし</sup>から東宮橋<sup>とうみやばし</sup>の間)から運んだものと伝う。

しかしその実体は、袈裟丸山火山が噴火し、およそ百万年前後という途方もない年月をかけ自然が造り残した柱状の横方向の節理(規則的な割れ目)の景観だ。

賽米の塔と同様に、節理によりて裂け、周囲も次第に崩落して中心だけ(一本だけ)が残ったものそれが「相輪塔」である。

## 五 賽の河原

相輪塔から約一・五<sup>キ</sup>、塔ノ沢を登り詰めた稜線（標高一五五〇<sup>尺</sup>）に「賽の河原」が広がり、目前に袈裟丸山が一望できる。

昭和三十年代には、赤茶色した袈裟丸山火山の噴出物で稜線一面が覆われ荒涼としていた。それはまさに三途の川手前の「賽の河原」を思わせる光景であった。今では低木が生え広がり、当時とは大きく変わってしまった。

「袈裟丸山」「賽の河原」には弘法大師にまつわる話が伝わっている。

弘法大師が第二の高野山を開山しようと全国を巡錫（じゆんしゃく）（行脚）し、赤城山にやってきた。

しかし、山の神様が仏の地になることを嫌い、弘法大師に「一谷を隠し、九百九十九谷を現す。残りの一谷を探せ」

と命じたという。しかし、一谷は見つけきれなかった。

落胆した弘法大師は袈裟を丸めて山へ埋め下山したことから、袈裟丸山と呼ばれるようになったと云う。

また伝えに曰く。その昔、弘法大師が夜ここ（賽の河原）を通りかかると、赤鬼青鬼に責め立てられて子どもたちが泣きながら石を積んでいた。

親より先に亡くなった子どもは、その親不孝の罪によりこの河原で石積みをしなければならぬ。

積みあがると地獄の鬼たちが出てきて石積を崩してしまふ。子どもは泣きながらも石積みを限りなく繰り返さなければならぬという。

大師はその姿を見て哀れに思い、三夜読経して子どもたちを苦しみから救い出したという。

賽の河原の片隅には、いつの頃に造られたか風化した「地藏菩薩」が一体たつてござる。

地藏菩薩は、「お地藏さん」「お地藏様」として古くから親しまれている仏。お地藏様にまつわる昔話が日本全国各地に多々あることからお地藏様が人々に親しまれていたことがわかる。

我が子を失った親は、賽の河原で鬼に苦しめられている子どもを助けてほしいと地藏菩薩（地藏様）に願い、心の安堵を得られることから、子どもを救い・子どもを守る仏として崇め信仰されるようになった。

親は子をおもい、子は親をおもふ。親と子をつなぐ仏として地藏菩薩様（お地藏様）は、今も人々に広く尊び敬われている。

## 加筆 賽米の塔のこと

今年（令和七年）十一月十五日（土）数年にわたり探していた「賽米の塔」の所在をほぼ確認できた。

その場所は、「塔ノ沢登山道入口（駐車場）」から道標に従って「寝釈迦・相輪塔」方面へと坂道を上り「寝釈迦入口」の木橋の所である。

かつてこの坂道は、塔ノ沢左岸の山腹をぬうように通る峽路であった。昭和三十年代の始め頃に、林道として整備され塔ノ沢の右岸側を通る現在の道となった。

この坂道を上ること五く六分。塔ノ沢を渡河する「寝釈迦入口」の木橋に着く。

木橋の先の山肌（塔ノ沢左岸）に、節理の入った巨巖が堂々とそびえ立っている。

この巨巖について、岩澤氏は『黒川峽と澤入塔』の「塔

ノ澤峽概観」において次のように記述している。

「(般若の)滝の下流を渡り塔之澤溪中に入り河の左岸に出で四五百米進むと、右側山隈に岬々として屹立する巨巖がある。

これが賽米の塔である」と。

また、木橋の左側(塔ノ沢右岸)にも巨巖が座している。

その巖の中ほどには、節理の合間からさらさらと滝が流れ落ちていく。この滝には名称もなく「賽米の塔」にちなみ「賽米の滝」と名付けることにする。

塔ノ沢を挟んで対峙する二つの巨巖は、「寝釈迦・相輪塔」への門(入口)のように屹立している。

かつて寝釈迦・相輪塔は女人禁制の地であった。

そこで女の人たちは「賽米

の塔」で、米をお供え(賽米)

し、涅槃像と澤入塔とを遥拝して里に帰ったというおごそかな場所であった。

四分の三世紀以上にも及ぶであろうか、地域からも長い間忘れ去られていた「賽米の塔」の場所を推定することができたことは大きな喜びだ。

課題も残されている。

はじめに、二つの巨巖のどちらが「賽米の塔」なのかを特定することである。

岩澤氏の『黒川峽と澤入塔』には「賽米の塔」は「巖頭三岐して」とその形が記述されている。そこで、踏査・空撮を実施し確認する。

次に、「賽米」の読み方である。岩澤氏は『渡良瀬峡内澤入塔見聞記』(大正十四年)と『黒川峽と相輪塔』(昭和八年)の著に「さごえ」と読み記している。

当時、地元の人々は「賽米」と書いて「さごえ」と読んでいたのだろうか。

『勢多郡東村の民俗』(昭和四十一年)や「勢多郡東村誌」(平成十年)にも塔についての記述や読み方についても記載はない。

しかし、現在のみどり市HPには「せいまい」という読み方のみを示している。この点についても検討しつつ読み方を揃えたい。

こうして、「賽米の塔」「賽米の滝」の標識・説明板などを設置し、この場所に再び光をあてたいと考える。

おわりに

大沢寺に始まり、塔ノ沢不動滝、般若の滝、相輪塔と寝釈迦、賽の河原を巡った。

そこは豊かな自然に包まれている。塔ノ沢溪谷には心地よい音を立てながら流れる溪流、点在する大小さまざまな岩、陽の光に揺れる木々、小鳥のさえずり、風の音。

明治生まれの祖父母が「山には神様が住んでいる」と話したことがあった。

いにしえの頃、村人は山の豊かな自然と向かい合い、恩恵を受けながら生活していた。

こうした日常のなかから、自然への畏敬の心が、伝承・風習そして信仰として生まれてきたのであろう。

そして、長い間村人たちによつて、途切れることなく護られ伝えられてきた仏教信仰の痕跡である。(おわり)

